
デッド・ライン

凧竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デッド・ライン

【Nコード】

N2531E

【作者名】

風竜

【あらすじ】

2008年の世界的な不況により国家間の貧富の差は明確となった。その後、混乱期によりに経済的弱者と成り下がった日本政府は自然消滅。かの地には「ニュージェネレーション計画」によって建造されたコロニーシティーを中心に有志による自治体が作られ、そこに住まう人々は貧しいながらも遅く生活していた。しかし、世界の混乱期に便乗しコロニーシティーを占拠して支配者にのし上がるうとするものもある。とあるコロニーシティーを支配する団体は団体を盲信する者達も支配に対してレジスタンスを続ける者も多少

の差はあれども皆過酷な運命に巻き込まれていくのであった

ブローグ とある少女の日記（前書き）

マトリックスとコードギアスに影響されて適当に描いた初心者の駄作ですが、興味がある方は読んで下さい（＾ー＾；）

ブローグ とある少女の日記

ある日曜日のお昼過ぎのことでした

家族と教祖様の演説をお聞きに列車を使って市内へと向かっていた最中の事です。

今日行われる集会のパンフレットを片手に父や母そして6歳年下の弟と一緒に車窓の景色を楽しみながら前回の集会の事、そして教祖様の素晴らしさについて話していました。その後三十分程で駅に着き、徒歩で会場へと向かっている最中にそれは起こりました。

集会が予定されていた私の高校程の広さを持つ建物から銃声が響いた後に建物の中から悲鳴と怒号が聞こえて来たのです。

この異様な状況に母はすっかり腰を抜かしてしまい父が私に母を助け起こしながら

「伏せていろ」と叫びました。

私の頭はすっかり混乱してしまいしばらくおろおろするばかりでしたが再び怒鳴った父の声にびっくりして反射的に両手で頭を庇いながら熱がこもったアスファルトに突っ伏しました。

銃声がやんだ頃に父の声が再び聞こえましたしかし先ほどとは声色が弱々しく違い語尾も震えながら私の弟の名前を小さい声で呼んでいました。

私は何事かと思い父が力無く向いていた方向に視線を向け、そこで信じられないモノを見てしまいました。

そこに弟は居ました

頭が無い状態で

弟は仰向けに倒れ頭部はぐしゃぐしゃになって脳漿や頭蓋骨を飛び散らせ、その周りにはまるでバケツを使ったようにぶちまけられたか

のごとく血の海が広がっていました。

その様は昨年の夏に家族でやったスイカ割りを連想させ、見事にスイカを割った後の弟の満面の笑みを思い出し

混乱した私は弟に肩を掴んで起きるよう呼び掛けましたが直ぐに父が私を弟から引き剥がしてしまいました。後ろでは母が吐いていました。

今考えると私があのような行動に走ったのは明確に説明できませんが、弟の体が頭以外傷がなかったので錯乱した私は揺さぶれば弟が直ぐに起き上がる事を信じていたのかも知れません。

教祖様の教えに従って真面目に生きていた私には肉親を失う不幸は無いと思っていましたから。

自警隊の方に後で聴いた話によりますと、弟は教祖様を狙うテロリストが逃げる最中進路上にいた弟を撃つたらしいとの事でした私には全く理解出来ません。

何故教祖様を信じていた弟が教祖様に楯突いて命まで奪おうとするテロリストなんかには殺されなければいけないのでしょうか？

なんで教祖様の言うことを守らない野蛮な人達の為に弟は命を失わなければならないのでしょうか？

私は考え両親の反対を押し切って自警戦闘機関に入る事にしました。理由は二つ、

私の様に悲しむ人達を減らす為と、教祖様に楯突く野蛮な異教徒共を1人残らず天へと送るためです

そう、
全ては教祖様の為に

一話01〜逃亡者〜（前書き）

プロローグから大分間が空きましたが第一話の一部分です。

一話01 逃亡者

海の近辺の広大な草むらで数人の黒服が一つの影を追って駆けていた。

だが、影の脚は並の速さでは無く追うものとの距離はいつこうに縮まる気配を見せない、しかしそれに付随するように走る黒服達も共に尋常では無い身体能力の持ち主である事が見てとれる事が判る

そして黒服達は何の前触れも無くいきなり影を見失った

追跡者達は混乱し、辺りを見回すが何処にも獲物の痕跡は見当たらなかった。

そして唐突に黒服の一人が肩口から左脇にかけて血を吹き出しそのまま倒れた

仲間の異変により緊張する一団

斬

ひゅんと空を切るような鳴る音と共にまた一人、黒服が地に倒れる「警戒しろ、裏切り者はあの」

そこまで言いかけた所で黒服が倒れた

最後になった一人は拳銃を構え訓練された動きで警戒する

がさっ

草の向こうからかすかだった物音がした

黒服はそこに銃口を向けて近づいていく、その時だった

「後ろだ」

声が聞こえたと同時に左脚の太股に鋭い痛みが走った。

「お前には質問に答えて貰う」

脚を庇いながら振り向くとそこには黒いコートを着た男が黒服に日本刀の切っ先を突き付けていた。そこで最後の黒服は理解した。男を追っていたつもりが狩られる側、すなわち獲物は自分達であった事実を

「お前達を指揮していたのは誰だ？」

「・・・」

黒服は男に向かって銃を向け引き金を引こうとしたが、それは出来なかった

発砲する直前に男の日本刀が拳銃を半ばから切り落としたからだった

「、、、、ッ」

黒服の表情に初めて焦りが生まれた

「もう一度言う。お前達を指揮していたのは誰だ？」

黒服は答えなかった。その代わり叫んだ

「裏切り者がッ！」

そう言って、口の中で奥歯に仕込まれたカプセルを噛みしめた後、黒服は力無く崩れ落ちた

「毒か。高度な訓練を受け忠誠心が厚く機密を絶対に漏らさない部隊。となるとやはりあいつが、」

そこまでひとりごちて男は頭を抱えた

「死ぬかもしれんな」

ネガティブに呟くが悲壮感は見せない。まるでそれすらどうでもいいかのようにだった

「いや、俺が居なくなったらあいつの面倒が見れなくなるな」

また呟き、踵を返す。

そして海沿いの橋の方角へと歩き出す。

背後にはいつぺんも振り向かず真っ直ぐに歩いて行く

そして草原には物言わぬ黒服の死体のみが残された。

一話〇二、逃亡者

月下の元、影が走る

その向かう先に存在するのは大河そして巨大な建造物
橋

この橋は普通に川と岸を道で結び物品や人材が輸送される様々な交通の役割を果たしているただの建造物ではない

本土と南部を線引きの役割。つまり両地域を隔てる境界線である

本土と橋の向こうにある南部側の対立の歴史は今から約20年前にも遡る

まだ『教団』が本格的に日本本土に対し支配力が及ばなかった頃の話になる

『教団』の幹部が一人脱走し九州地区の鹿児島まで逃げ、対抗組織を結成した又は『教団』の資金を無断で使用した為肅清から逃れるに『南部』の前身にあたる秘密結社に情報を流した際出来たとも言われている巨大な自警組織みたいなものだと言われている

そして影が向かう方角はほぼ南部

そして先ほどの黒服達が彼に向かつて裏切り者と言い放った事からも彼が非教団勢力である『南部』へと向かっている事が解る

彼が何故其処へ向かうかは彼自身を除いて他には居ないが、彼が求めている答えはこの橋の先にあるのかもしれない

だがその進行方向に立ち塞がる者が存在した

そのシルエットは月明かりに照らされて朧気に姿を現している

身長170cmのコートを羽織った女は先程まで疾走していた男の

進行方向に自ら立ち言った

「まさかたった一人の裏切り者に特部の四人が皆殺しになるなんてね。だけど、」

彼の方を見てにこりと場違いな微笑を浮かべ

「でも、その裏切り者が貴方だったなんてね

ジン」

ジンと呼ばれた男はそれに応じ、答えた

「退いてくれ。昔会った縁だ、行き先の邪魔をしないでくれ、戦いたくないんだ」

殺気を全く隠そうともしないでジンが答えた

だが女の方はその凄まじい程の殺気に当てられながらも、まるでそれが無いものかの様に不気味な笑顔を顔に残したままそれに答えた
「そうもいかないわね。貴方は裏切り者で異教徒。存在するだけで教祖様に仇なす存在。例えば昔の知人だからと言って見逃す気は全く無いわ」

その言葉を聞いてジンが答える

「オレの復讐は終わった。だから

“教団”は抜ける。元々俺は力を手に入れるために入っただけだ。」
女はまるで愉快的なジョークを聞いたかの様に笑った

「貴方が加担してきた

“肅清”はかなりの数よ。それで築けられた死体の山によって

“教団”は繁栄してきたのよ。それを」

そこで一旦言葉を切り

「今更否定するの、ジン？」

途端にジンは齒を食いしばり苦悶の表情を浮かべ反論する

「そうだ。どうせ復讐の為に他人の命を切り捨てた身だ」

「だが、俺はあいつに会った。

そいつはオレの行いを肯定すると同時に否定した。奴への復讐を終えたオレは今更他人の為に生きることすら出来ないが、、、、

「それでも抜け殻のような存在でしかないオレを必要としてくれる奴がいるならそいつの為に戦う覚悟くらいはある」

それを聞き溜め息をつく女は

「そう。じゃあ死んでくれる？異教徒さん」

とだけ答え眼光が変わった

先程のふざけた様な態度は面影すら存在せずジンを見る視線は敵の様子を伺い、相手一辺の隙すら在らばすぐさまに獲物に飛びかかる肉食獣の様なしなやかかつ凶暴な雰囲気醸し出している

それに対し何もリアクションを起こさない程ジンも鈍くなかった

全身の神経を前方の敵に向けて集中

今までの経験によって研ぎ澄まされた感覚を最大限まで拡張

先ほどの戦闘で消耗した彼にとって相手の戦闘力は馬鹿に出来ない

長期戦はこちらにとって不利故に狙うは一撃必殺

そしていつでも刀を抜けるように柄に手を掛け構える

そして2つの影はお互い殺気を放ちながら静かに対峙する

膠着状態が続いているのは双方共達人クラスレベルの相手から隙を見いだせないからであろう

だがそれにしびれを切らしたのかジンが一気に間合いを詰めんと踏み出す。

女の方もそれに対応し両肩から吊り下げたホルスターから二丁の拳銃を取り出し迫ってくるジンに向け一瞬で照準、誤差の修正、発砲を行う

ジンは刀の腹で銃弾を弾きわずかに後退する

こうして、夜天の空の下橋の上にて死闘が始まった

一話〇三〃逃亡者〃（前書き）

文の練度、戦闘描写がまだまだですね

一話03 逃亡者

橋上にて2つの影が何度も交差する

追われる者と片や追撃者

元々同じ場所に立っていた二人は今は互いの相容れぬ目的の為にぶつかり合う

二人はあらゆる面において対象的な存在だった
性別が違う

“教団”に入った目的も違う

そして己が得物すら異なる

決して仲違いや互いに憎悪しているわけではない

二人が対立している理由は目的、思想等の根本的かつ決して交わらず同じ方向にベクトルが向くことのない決定的な違い

逃亡者は自己に存在理由を与えてくれた他人のために、襲撃者は己が信念に殉じ組織に忠誠を誓うために

二人は不協和音を奏でながら刃を交える

「くっ！」

ジンは雨のごとく降りかかる銃弾をかわしながら後退する

奴 “教団”におけるトップ武装集団異教徒肅清部隊ナンバー
一 爛の名は伊達ではなく

放たれる弾痕はスピードにおいて“訓練所”にて“強化”を受け豹のような素早さを獲得したジンの動きすらも的確に捉えていた
それを必要最小限の動作で交わすジンだが逃亡における度重なる疲

劣と先程の戦闘における消耗のお陰で致命傷には遠いものの二発ばかり弾をもらっていた

（話し合いで帰ってもらうなり、体力回復の時間を稼ぐなりしたかったがまさか彼処まで組織への忠誠心が厚いとは、、、）

ジンは己の読みの甘さを呪う

どうやら“教団”で復讐を果たしたが為にカンが鈍ったと半分無理矢理納得する

今はそんな事を考える余裕なんてない

現在のコンディションでは彼女を倒す事は難しいだろう

戦闘における彼女は自分と同格

万全の状態でミドルレンジに踏み込むだけの体力が有れば決して負ける事は無いだろう

だが今の自分は疲労に加えて傷を追っている

そして20メートル程の距離を保たれの近付く事も出来ずにひたすら銃撃されている

彼女に油断や満身があればなんとかなるかもしれないが、先程のやり取りで激怒させてしまった以上本気で自分を殺そうとする事は明白。基本的に無表情な彼女が普段見せない狂気を孕んだ笑顔がその証拠

なればこそ先刻の居合いですぐに決着をつけたかったのだ簡単に見切られ体を僅かに捻っただけでかわされた上に隙だらけの死に体に銃弾を喰らい手傷を追った以上後退するしかなかった

絶え間なく飛んでくる銃弾を紙一重の体裁きでかわし避けられないものは致命傷にならなければ以外敢えて体で受ける

ジンは歯噛みする

次々と傷を負い消耗しつくした体ではもはや相手を倒す体力は無い

それどころか相手の攻撃を避ける事すら困難になりつつある

このままでは逃げる事すら難しくなるだろう

逃げられないということはこの橋で殺されるか、捕らえられて“教団”に連れ戻され処刑を受けるかの違いどちらにせよ敗れるのなら死は確実でありそれだと約束が果たせなくなる

それだけは避けたかった

ならば取るべき道は一つ

逃げるしかない

こんな所で死んで何になる

何も残らない

なら何故この場所を訪れたのか

彼は自らに問いかける

途端に銃撃

狙いは頭部と右脚

二つとも避けるのは不可能であり刀で弾こうにも決断が余りにも遅すぎた

だがジンは自ら姿勢を崩し地面に倒れるようにして辛うじて頭部への銃弾を回避、だが次の瞬間鋭い痛み顔に顔を僅かにだが引きつらせる

しまったと思ったがジンは諦めてはいなかった

彼女は無駄な事はせず敵に確実にトドメを刺すタイプである
必ず自分の頭にトドメの一撃を撃ち込む為近づいてくる筈だ

その時にこそ逃亡の機会がある

いまはじっとしておくのが最善だ

ジンはそう思って事に備え静かに巖のごとく動かず体力を温存する

そして、動かなくなったジンを見て爛が近づいてくる

「倒れるのが早くないかしら？ 訓練所で昔見たあなたは決して諦めなかったのに」

更に失望感を隠さずにジンに語りかける

「やっぱりあの女に騙されて異教徒にされから腑抜けてしまったのかしらね？ ま、異教徒は全員組織滅するに決まってるけどね、それは貴方でも例外ではなくてよ」

爛が靴音を鳴らしジンに近付く

ジンは靴音が五月蠅いと少し思った

爛が銃口を向ける

今だ

ジンは袖に忍ばせた投擲用ナイフを放とうと左腕に意識を集中し
「なあんだ。やっぱり昔のままだったのね 嬉しいわジン」

その腕を満面の笑顔を浮かんだ爛に靴底で思い切り踏み砕かれた

一話〇三ゝ逃亡者ゝ（後書き）

次の話はあまり間をおかずに出したいと思います

一話04ゝ逃亡者ゝ（前書き）

ようやく一話終了

あー疲れましたf^
|^
;

一話04 逃亡者

「、、、、。」

爛はジンの右腕を踏みつけた体勢のまま言った

「やっぱり何か隠してたのね。貴方があっさり倒れたから畏だと気付いたけど近づいてあげたのよ。でも、、。」

彼女は踏みつけた脚に更に力を込める

踏まれた腕は軋み、鈍い音と共に完全に砕けた

「畏にしては陳腐すぎるわね。私の性格を知っていたからこそ、受け身を取らないでそのまま倒れたのだろうけど、わざと引つかかって近づいてあげたのは共に訓練所で頑張った同僚に最後の死にゆく手向けを送ろうって思った訳」

その後、クスクスと笑った

耳障りな笑いに顔をしかめながらジンは一言だけ悪態を付く

「昔から思ってたんだが、性格悪いな。あんた」

爛はすぐに答える

「当然よ。教祖様に楯突いた異教徒にはなるべく痛みと屈辱を味わせて殺す。見せしめの意味も有るけど、秩序を乱す異教徒は地獄へ行く前にこの世のなかでも苦しみを味わって貰わないとねえ、なにせ教団に楯突く汚れきったテロリストなのだから」

ジンはそれを黙って聞いていたが自らの危機的状況に置かれながらも問うた

「何故あんたはそこまで教祖を盲信する。過去に、、」

そこまで言ったところで何か思い出したくない様な辛い表情を造り口をつぐむ

そこで爛は初めて彼に対して狂気以外の感情を見せた

それは先程見せた彼女が向ける異教徒への憎しみでも、テロリストへの基地外じみた異常な程の敵意でもなく
ただ、かつての同僚に対しての同情だった

「そうか、何も過去に家族を失ったのは私だけじゃないのね。貴方は私以上に酷い境遇だった」

それに対しジンも一瞬驚いたような顔をし

「やはりあんたもだったか。だろうな、好き好んであそこにわざわざ入る奴は居ない。いるとすれば自衛隊での作戦に満足出来ない筋肉馬鹿か、ただの変態か俺達の様に、、」

そこで爛はジンの後に言葉を続ける

「復讐に狂ったバーサーカーだけね」

そこで過去を懐かしむかのように目を細めた

「いいわ、冥土の土産に教えてあげる。同じ復讐者のよしみでね。」

そうして爛は語り出す

教団を盲信していたとは言え立場的には一般人だった彼女をリベンジャーへと駆り立てた、凄惨な過去の出来事を

「、、、、以上よ。ま、一家全員惨殺された貴方よりはマシな方かもしれないけど」

ジンは静かに話を聞いた後、言った

「それで、あなたの一家はみんなを幸福にする教祖様つてのを信じてあなたの弟は天罰を受けるべきテロリストに殺された訳だな」

それでふてぶてしく猛獣のように鋭い笑みを見せた後に一言だけ言った

「馬鹿だなあなた。教団がそうやってテロリストのせいに見せかけて信者を増やしてるっていうマインドコントロールに何故気付かない？ 思考したり調べたりするなりして裏を取らなかったのか？ ましてや思考するのも教祖サマとやらに任せちゃったのか」

「何ですって？」

爛は驚きの表情を浮かべた「そんなの嘘よ！ 教祖様は私を騙す筈がないだってあの方は、、、、」

その狼狽はジンの冷徹な一言によって断ち切られる

「あなたを受け入れてくれたからか？ 違うな。それは信者、、いや便利なコマを忠実な猟犬にするための儀式。下らない上に面白くないエンターテイメント、演出の一環さ。あなたが家族と一緒に有り難い演説とやらの中で起こった襲撃もそれだ。良くできた自作自演だ。ああやって信者の忠誠心を集中させてる、手口が上手すぎて吐き気がするがな。」

爛は混乱から未だに立ち直れていないながらもはつきりと尋ねた

「そんな、教祖様が私を騙してたっていうの？何でそれを貴方が知ってるのよッ！どうせ狂ったテロリストの詭」

「違うな。俺はあらかじめ知っていたのさ。何故なら教団のいけ好かない連中に惨殺された。俺の親父はお前から言わせれば狩るべきテロリストだったからな！」

爛はやつれながらも僅かに狂気を取り戻した瞳をギラつかせ叫ぶ

「その狂った考え、教祖様を陥れる言動、狩られるべきテロリストを親に持ち恩を仇で返す血塗られた血筋。やっぱ貴方は狂っているわ！」

「黙れッ！」

罵倒されたジンは叫び動かない筈の右腕で邪魔な爛の脚を掴み握り潰す

右足を潰された爛はたまらずジンから離れる

「っ、っ、っ」

それでも彼女が膝をつかなかったのは流石としか言いようがない束縛を逃れ先刻とは打って変わり怒気に満ちた表情で彼は叫ぶ

「お前たちがテロリストという区別はいつたい何だ？武力をもって傍迷惑な騒動を起こす連中が親父だとしたなら殺されても仕方ないだが俺の親父は教団との争いも話し合いで決着を着けようとしたッ！親父はなるべく平和的に教団の規模を縮小しようとしていたんだ。なのに何故死ななければならぬ？」

今度は爛が目を見開いていた。先程折ったはずのジンの右腕が何故動けたのといった疑問すら吹き飛んでいた

「それは、、」

ジンは侮蔑を露わに吐き捨てる

「疑問を持たない教団に都合の良い人形になっているからそんな事すら分らない、考えようもしない。そんな連中に家族は殺された。重度の罪にはならないとはいえ協力したお袋も10歳にも満たない妹すら殺した。だから俺も殺したよ。家族を殺した連中を、そいつらを仕切っていた教祖サマご自慢の息子もだ！」

そして折られたはずの右腕を掲げ

「驚いたか？この体質も復讐の為に教団に入って数々のナチス顔向けの人体実験を受けた結果だ。最も」

そこで一旦怒りを納め自分を嘲笑うかのように暗く笑い

「その結果、殆ど人間を辞めてしまったがな、奴を殺すにはこれくらい必要だったけどな。」

爛は目を見開き呻く

「再生者。それで右腕が、でもそれじゃあ貴方が、、」

ジンはもう橋の向こう側に向かって歩いていて
そして一言だけ告げる

「わかったか？俺は自分の命なんかに興味は無い。元々家族を殺された復讐を誓った時点で俺はもう死んだ。ここにいるのはただの幽霊だ」

そして遠ざかるその背中是最早彼女の方に関心を払って居なかった

夜の闇に星が瞬く

この夜国境を通過して一人の裏切り者が南部入りを果たした

夜の闇に星が瞬く

この夜国境を通過して独りの裏切り者が南部入りを果たした

二話 〇一 歓迎

南部

そこはそう呼ばれている

面積は橋で繋がっている本土島の五分の一程の広さしか無く、都市部に限っては規模は本土島に対しても、比べものにすらならない程に小規模な本土の者から言わせればまさに辺境の地であった

そしてこのような地を拠点としているゲリラが何故「教団」にただ一つ対抗出来ているのかもだれにも解らなかった

その地にかつて「教団」に属し、数々の南部ゲリラを葬り去った男が足を踏み入れたのも昨日の月夜の出来事であった

見渡す限り日の光すら深淵には完全に届かず、日光を遮る緑色の巨木が並んでいる

地面は深緑色をした苔の絨毯一面に覆われており、辺りにはキノコを生やした腐った巨木があちこち見えた

そしてこの静寂な森にとって、明らかに異物とよべる男の姿があった
先程の戦闘で心身共に消耗きつた「教団」の裏切り者。ジンである

「ッ」

彼は疲弊していた

当然だろう

何せ長きにわたる逃亡の後、“教団”の追つてと戦いながら橋に辿り着き、そこで特別部隊の爛と交戦。彼女によって瀕死の怪我を負いながらも自らの切り札である再生者としての能力をも使用し、ど

うにか逃れたもののその代償は無視できず、もはや死に体である

次に“教団”の追っ手なり、回復した爛なりが襲ってくれば、今度こそ確実に殺されるか、捕らえられて見せしめに公開処刑を行われるであろう

ジンにとって自らの命は軽い

復讐の道を選んだ時からその覚悟はすんでいる

否、十年前から自分の血肉はあの男 教祖の息子、笑いな
がら彼の家族を惨殺したシントに対する憎悪によって形づくられている

そしてシントを殺す以外の生き方も選択しなかった

だから自分の命は惜しくなかったし、復讐を果たした今、自分が死んでも構わなかった

だが事情が変わった

“教団”にてある少女に出会い、彼女の代わりに目的を果たすと決めた時から、無闇に死ぬことは出来なくなったからだ

それは彼女が少女に対して一方的な“約束”のためであったからでもある

だから簡単に死ぬわけにはいかなかった

だから何としても彼女を逃がした南部へ自分も向かう事にした

“約束”を守る為に

進むジンの向かう先の前方の木々の間から光が漏れている

あそこは出口だ。出れば森からは抜けられる

その思いに体を突き動かし体力の限界はとうの昔に越えているにも関わらず意志の力だけで進む

ただ前へひたすら前へ

傍目から見ても遅くしかし愚直な前進を続け、ジンはようやく光に辿り着いた

まるで光に祝福されるかのようにジンの体は照らされる

だが次の瞬間、彼は緊張感を纏い。疲労しきった体で遅々とだが、しっかりと体を戦闘態勢に移していく

ジンの目の前の視界には

銃と迷彩服で完全武装した十人のゲリラ全員が彼に銃口を向け待ち構えていた

二話〇二〃歓迎〃（前書き）

文とか描写とか初心者ゆえかなり汚いですが、今後精進しますので
よろしく願います

二話〇二 歓迎

本来、静謐かつ壮大で、生命を育む自然の気配に溢れているはずの樹海に人の気配が在った

その数、実に十一人

登山者や遭難者と見るには明らかに多すぎるその数は、常人ならば勿論その類のカテゴリーに当てはめる事は到底出来ない程に物騒な格好をした者達である

その迷彩服を着た十人はコートを羽織った男一人を円状に取り囲み銃を向けている

囲まれ絶体絶命の状況にいるはずのコートの男 ジンは万が一の逃走に備えて戦闘態勢を整えてはいるものの本人に交戦の意志は無かった

（かなり警戒をされている。問題はこれからどうやってこちらに敵意が無いことを示し投降の意志が有るかを証明するかだ）

そう、彼は武装したゲリラ達と無駄な殺し合いをする気は毛頭無かった

ジンの目的は“南部”に投降し、どうにかして自分が逃がした少女に会うためである

この場を切り抜けた後にどうするか、といった事は実を言うと全く考えていない

今はただ自分が逃がした少女に会いたかった

あの時

シントに復讐を果たした後、彼の心中を少女が正解に看破し自分に

伝えた事に対し真実を知りたかった

どうやって自分の心の中を見られたのかは解らないが
少なくとも少女に言われたことは事実だった

ただ

それを確かめるしかやることなすことが思いつかないだけだったが、
復讐に打ち込んでいる時の様に何かを行動を起こさないと、自分の
存在が虚空に溶けて無くなってしまいう気がしたからだ

「お前、“教団”のエージェントだな。何故こんな所に居る？まさ
か一人でここに攻め入った、と言うわけではあるまい。それにその
格好は戦闘に巻き込まれたのだろう」

彼の回想を絶つかの様にゲリラのリーダー格らしい筋骨隆々な体格
の良さげな身長約百九十センチの大男が言った

「その通りだ。俺は“教団”を裏切った。もう向こうに戻るつもり
もないし、先程俺を始末するための追っ手と戦ってきた、このなり
は戦闘に巻き込まれたお陰だ」

とジンは返事する

そして再度、言葉を口にした

「事はそういう訳だ。こちらとしてはそちらの南部同盟に亡命した
い。必要に応じるのならば拘束した上で俺の武器を全て取り上げて
もいい」

それを聞いて

リーダーらしき男が訝しげに眉を顰める

「随分と潔いな。ならこちらとしてもそうして貰いたい所だが、それが貴様の罠である可能性も否定出来ない。なぜなら我々が知りうる限り“教団”のエンジニアは素手であっても人を簡単に壊せるように調整された人外共だ。それで我々の本部に侵入し、最高司令官を殺されでもしたら笑い話にもならない。最も、」

そこで思い直したかのように彼は言う

「お前が殺してくれたら、こちらとしても大助かりなんだがな」

その時にリーダーが見せた表情は明らかな侮蔑だがそれはジンに対して向けられたものではなく、先程この男の独白に出てきた“最高司令官”とやらに対してのものだった

「、、、、？」

少しだけ男の態度に疑問を感じたが、そんな些細な事はどうでも良かった上に、このままだと埒があきそうにないと判断したジンはこう告げた

「そうか、だがご生憎様だったな。俺にはその最高司令官とやらを暗殺する気は無いし、あんたらに対して敵意も抱いて居ない。俺が投降する目的が知りたいのなら“教団”の報復が怖い。という理由はどうか？それだけでヤツらは俺を殺す理由がある。何せ俺が殺したのはよりによって教祖の息子、“聖者”のシントだからな」

「何、、、だと？」シントを殺した

その事実を口にした時明らかにゲリラのジンを見る目が畏怖に染まった

中には信じられないといった表情をする者も居る

「お前、それは本気か？」

「事実だ。確かにこの手で心臓に刀を突き立てた。あいつは死んだ」
ゲリラ達は動揺している

リーダーに対して

「上からそんな事は聞いていない！」

「どうする？信用するか」

などと言っ者もいる

そしてしばらくすると

「解った。ひとまずお前を連行する。シントの生死はこちらで判断を行う」

とだけ告げると

「では武器を捨てる。刀と袖、靴に仕込んだナイフもだ」

目論見が上手く行ったことに心中安堵したジンはそれに従い先程より構えていた刀を地面に置き、袖から投擲用ナイフ、靴から仕込みナイフを抜き取り刀と動揺に足下に放った

次の瞬間に

統制の取れた動作で数人のゲリラがジンを取り囲み、後ろに回した両腕を手錠で拘束、前の者は刀とナイフを拾い上げジンから離れる

そして一行は歩き出した

南部同盟第十機動部隊基地に向かって、、、、

二話〇三〽歓迎〽（前書き）

久しぶりの更新です。

デッドライン読者（居るのか？）の皆様。
お待たせ致しました。

二話〇三 歓迎

ゲリラ達に連行され、ジンが連れて行かれた場所は基地と言うにはほど遠い、民間の学校程の広さしかない粗末な建造物だった

森林から開けた場所に存在する壁は鼠色の所々弾痕が点在する薄汚れたコンクリートで構成されていたものの建物自体の造りはそこそこ堅牢に見え、古くからそこに在ると言わんばかりの存在感を放っている

また、周りには土嚢が二メートル程に渡って積み上げられておりそのすぐ手前には木製の杭が針地獄のように尖った先を天へと伸ばしていた

戦国時代の城に備え付けられていそうな罠ではある、流石に爛クラスのエージェントには小石並みの妨害にも満たないだろうが、

ゴーストと呼ばれる“教団”の最下級雑兵に対してはそこそこの有効に見える

更に外周の他にも土嚢が低く積まれている場所も点在している

恐らくは攻め込まれ際による敵軍の進行妨害と、身を守りながら銃器等で味方が応戦するためのバリケードも兼ねているのだろう

土嚢で囲われた外周を含めると直径一キロ程の広大な砦はまさに前線基地と呼ぶに相応しい威容を醸し出していた

尤も此処をずっと守護しているゲリラ達の手によるものが殆どだろうが

「着いたぞ」

ゲリラ隊のリーダーが腕を後ろに回されて、手錠で拘束されたジンに対して告げた

「ここか」

ジンが拘束されてから基地に来て初めて発した言葉はそれだけだった彼にとってお粗末な基地はあまり興味が無い上に、自身の関心事は他にあったのだから仕方ないと言えば仕方ないのだが

「これからお前はひとまず拘束されたまま牢屋に入る事になる」

「そうか」

自らの処遇が決まったにもかかわらず、それだけの反応、一言だけの返事

あまりにも短すぎる問答でジンは抵抗すらせずに己の立場を受け入れ、

手錠をかけられたまま、ジンは基地内の牢屋に入れられた

ゲリラのリーダー曰わく、この基地の隊長と相談しジンの処遇を決めるという事らしい

勿論このまま捕まったままで居れば“教団”の裏切り者である以上彼の扱いはそれほど良くはならないだろう

拷問なり身体検査なりで色々調べ上げられ、最終的には研究施設なりに運ばれてエージェント用に改造された貴重な彼の体で人体実験までするだろう

これはあくまでもジンとして考えられる最悪の予想であり、決してそうなるとは限らないのだが、可能性の一環として考慮すべきである

そうなれば“彼女”に会うところの話ではない

“教団”の肅正ではなく捕まった先で戦わずに命を失うのはあまりにもバカバカしい

それなのにも関わらず彼がゲリラに捕まったのは、単純に体に休息を与える為と抵抗してもあの場所では一人殺した所で後は蜂の巣にされる　つまりは勝ち目がなかったからと言うことだ

仮に十全のコンディションを有していれば、あの程度の連中は条件次第で素手で渡り合える

そして、刀さえ持っていれば余裕で皆殺しに出来るだろうが、それでは意味がなかった

危険を冒してあっさり捕らえられた理由はもう一つある

肉体強化を施されたジンにとって鉄格子で覆った牢屋など簡単に脱獄できるモノにすぎないからである

ただ、彼は今のところ“彼女”に関する情報を持ち得ていないし、個人で調べて入手できる情報は限られる

だから、組織で上位の権力を持ち得る人物と接触し“彼女”の行方に関する情報を得たかった

先刻にて彼がゲリラ達に抵抗しなかったのも出来るだけ温厚に事を運ぶ必要性もあったが故

もし、ゲリラ達に何のメリットも見いだせず無かったとしたらジンは全力で逃亡したはずだ

何度も言うようだが、彼は“教団”によって常人には持ち得ない再生能力とオリンピック選手をも超える身体能力を有した人を殺すための殺人機械だ

加えてゲリラ達の練度もジンがこれまで交戦してきたレジスタンスに比べて水準も馬鹿に出来なかった

仮に体力も落ちているこの状態でゲリラ達と事を交えれば数人が手加減出来ずに殺してしまったかもしれない

そんな事をして罪の意識などとうの昔に磨耗してしまったジンはなにも感じなかったかもしれない

ただし、自分が救い救われた“彼女”がそれを知れば、きっと悲しむだろう

それを思うと遠い昔に忘れた良心が疼くのを感じ

ジンは固い石畳の上で一週間ぶりの眠りに落ちた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2531e/>

デッド・ライン

2010年10月10日05時02分発行